
バウムガルテン学派における象徴的認識と吐き気

島崎千枝 (東京大学)

吐き気とは、毒物や異臭に対する原初的な身体反応であると同時に、醜いもの、グロテスクなもの、あるいは非人道的な振る舞い——総じて「美しくないもの」に対して喚起される強力な拒絶反応である。そのため吐き気は美学と倫理、文化、社会を接続する重要な概念だが、その理論的研究は十分とは言い難い。

W.メニングハウスは『吐き気 —ある強烈な感覚の理論と歴史』(1999)において、18世紀から20世紀の美学・哲学の思想における吐き気(Ekel)の概念史を描出した。本書によると、M.メンデルスゾーンやレッシングらを代表とする1760年代の議論からカントに至るまでの記述において、吐き気は他の不快な感情(恐怖、悲哀、驚嘆など)とは異なり、単に表象されただけでも生々しく現実化される感覚であるとして、芸術への参与が許されない、いわば「絶対的他者」の立場を強いられてきた。

ところでメニングハウスは、バウムガルテンやG.F.マイアーといった美学成立期の議論と吐き気との関係性を背景に退けている。しかしマイアーは『あらゆる美しい学の基礎』(1748-50)において、認識の3区分、すなわち「明晰で判明」「明晰で渾然」「不明」のうちバウムガルテンが美学の領野として定立した感性的認識である「明晰で渾然」とした認識が、判明な認識へと変貌した際に生じる美の破壊を、吐き気を催す(ekelhaft)という言葉を用いて説明する。また、同書において醜(Häßlichkeit)は美の完全性に対する不完全性として、別種の説明を設けられている。ここから示唆されるのは、上記の議論で「絶対的他者」であった吐き気が、マイアーにおいても判明性の一性格として美—醜という端的な対立関係から外れる立場にあるということである。

本発表では、以上の指摘を行うと同時に、判明性の排除と吐き気の排除との共鳴を、M.メンデルスゾーンやレッシングがバウムガルテンらの記号論を引き継いで形成したイリュージョン理論にも接続する。芸術は記号を媒体として用いることを本質としつつも、記号は感性的認識に対置される象徴的認識=判明な認識をもたらすものであり、この矛盾を説明することが彼らの基本問題であった。そこでメンデルスゾーンが導入したのがイリュージョン、すなわち記号の透明化の作用である。一方でメニングハウスは、吐き気が常に現実として喚起されるために、記号の透明化よりむしろ無化を導いてしまい、イリュージョンのシステムが内破されてしまうという事態から、メンデルスゾーンは吐き気の排除を命じていると解釈する。

以上より、本発表はマイアーの議論から判明性と吐き気をつなぐを指摘することで、〈絶対的な現実化=記号の無化によるイリュージョンの破壊〉というメンデルスゾーンらが指摘した吐き気の本性を補強し、バウムガルテン学派の記号論における吐き気の立場の定立を目指す。